

銀杏の精子

稲宮 健一

牧野富太郎と近藤日出造の対談が週刊誌に載っていた。貧乏暮らしたところ、掛け取りが来ているときは、女房が合図の干物を窓の外に掛けておく、その間牧野博士は帰宅しないようにしていた。記事にはご高齢の牧野博士の似顔絵が入っていた。

中学（一九五二）の生物の時間に牧野博士と同じような境遇の植物学者の話覚えていた。一九世紀の終わり頃、植物の発生学の研究は欧州で進められていた。古代から現代にいたる進化の過程を明らかにする課題である。植物はその特徴により、菌類や藻類から、裸子植物、被子植物などが挙げられる。海藻や苔より進化した植物に裸子植物と被子植物がある。裸子植物はイチヨウ、シダ、マツがあり、被子植物は胚子が胞子葉に包まれて雌しべとなり、風や蜂などを介して雄しべの花粉が受粉される様子はよく知られている。一方、銀杏は雄と雌の木があり、それぞれの木に雄花と雌花が咲く。毎年五月に熟した雄花の花粉が飛散して雌花に届くが、花粉は雌花の花粉管の中にそのまま留まる。やがて八月下旬に精子が形成され、九月一〇日前後に動物の精子と同じように泳いで胚珠に到達して受精する。ぎんなんは種であって果実ではない。

朝ドラでも分かる通り、当時の細胞レベルの観測手段は光学顕微鏡で、種などの細胞は剃刀で薄くスライスし、プレパラート上に固定し肉眼で見ても、観測した像をできるだけ忠実に描写する。同じ現象を多数の人に観測させ傍証してもらって、広く認めさせる。世界初の銀杏の精子発見の偉業を成し遂げたのは当時東京大学の図工、技手の平瀬作五郎であった。一八九四年一月平瀬による顕微鏡下で銀杏の精子を観測し発見した。平瀬は始め、何か寄生虫かと思ったが、同室の助教であった池野成一郎はこれを見て精子であると直感した。

やがて、この偉業に対して、学歴の整っている池野成一郎単独に顕彰の話が持ち上がった。池野は平瀬なしなら受賞を断る言われ、両名に帝国学士院恩賜賞が授与された。

この銀杏は現在も小石川植物園に植わっています。